

作 川口幸宏

知的障害を持つ子どもたちの教育を切り開いた人の自立への旅



第8回

筏師哀歌

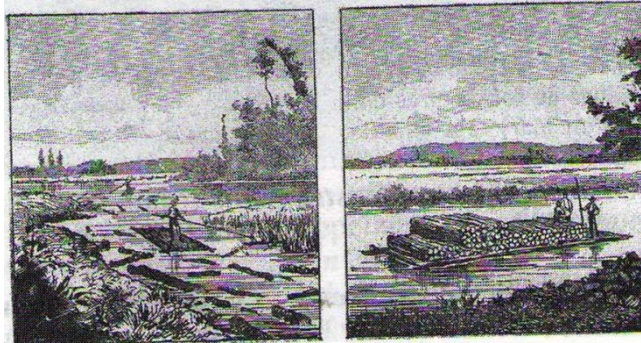


これまでは、いわば風物詩としてのクラムシーの筏師についてを取り上げてきました。セガンの生育史というかセガンに内在している文化の根源のようなものを見つけられないか、ということからです。無駄かもしれませんが、こだわってみる

のも悪いことではありませんよね。

筏師はその起源から今日までおよそ500年の歳月が経っています。フランス王を追って数えてみますとルイ XII、フランソワ I、アンリ IV、ルイ XIV、ルイ XVI、そしてフランス革命後の諸政体と続き、薪材筏がクラムシーからパリに向かって出発した最後は1877年のこと、ヨンヌ川沿いの他地域でも薪材筏は建築されパリに向けられるようになっていたため、パリに到着した最後の薪材筏は1923年とされています。この長い長い歴史と伝統を持ち、その間パリという大都

市の生活を支えてきた産業文化であるにもかかわらず、あまりよく知られていない、というのが実際のところではないかと思えます。その一例を示します。2008年刊のダニエル・ボカール著『中世から1914年までの職人事典—イラスト入り、選詩集付き』に、項目“Flotteur de bois (薪材筏師)”が収められています。それに添えられている図版はぼくが知っている薪材筏師とはまったく異なっています。



一瞬、他国あるいは他地域の事かと思わされますが、「木材で作る筏のトランは1449年には利用されはじめたフランスの運搬手段として知られる。ルーヴとか言う人が、暖房用の木材をモルヴァンからセヌ川およびその支流を利用してパリに供給することを考えついた。この方法は1870年に消滅した」とありますから、我が薪材筏のことです。しかもその説明さえとつくに誤っていることが証明されているのです。

このように認知度がいまいちではありますが、フランスのブルゴーニュ、ニヴェルネ地方ではじつに大きな産業文化遺産であったこと、だからこそ、そこで生きた人々に何らかの文化的刷り込みが為されていたであろうと推測することは誤りではありませんまい。ましてや首都パリの存続・発展に直接つなぎあった地域産業文化は他にそうあるものでもありませんまい。単純に地域的な文化として済ませてしまうわけにはいかない500年の歴史を持っているのです。

ぼくは精緻な歴史像を綴る能力はまるで持ち合わせていないのですが、幸いなことに、筏師にかかわる史資料がクラムシー学芸協会に収集保存されつつあり、その膨大な史料の中から公開されているものを管見することによって、筏師の実像により近づいてみようと思えます。



クラムシーは11世紀初めにオーセール司教区の一小教区としてその管轄下に入り、13世紀に入ってパロワス教会として聖マルタン教会を設立して

います。上の図版はパロワス内外の区切りを示す十字架が建てられていることを示す貴重なもの。17世紀後半の図版かと思われます。現在のレコレ街道にあたります。教会塔が遠望できますね。余話ですが、このような村はずれの十字架(パロワスの境界を示すシンボル)の下に子捨てをすることがしばしば行われてきた、という赤児受難史のシンボルでもあります。このことはまた機会を見つけてお話ししたいと思っています。



一方、パレスチナから逃れてきたある司教が住み着いたのが、旧クラムシーとはヨンヌ川をはさんで対岸の現在のベトレーム街区。13世紀のことです。この「異教区」こそが、後年、筏師たちの教区となるのです。現在も建築物としての教会はありますが(左写真)、教会としての役割を持ってはいません。礼拝堂

(チャペル)はレストランに姿を変えています。併置施設であった施療院(病院)はホテルに変身しています。現在「歴史的建造物」として保存が進められようとしています。次の写真が現在レストランとして利用されているチャペル跡で



す。調査に入り始めた頃はここで博士様が診察及び医学実験をしたのかと思ったのですが、博士様は旧クラムシー域内の救済院・施療院で医療活動を行っていたことが分かり、ちょっと残念でした。変な表現ですが。

このように宗教的に分離して成立したパロワス・クラムシー（旧クラムシー）とパロワス・ベトレーム（バイヤン）ですが、筏流しがパリの発展を支え、必要不可欠な産業として公知され、それなりの保護と推進との施策が進められるようになった中世後期には、両者の住民間の融和が進み、混住も始まります。筏師たちが守護聖人に聖ニコラを戴き、聖マルタン教会を舞台として活躍する姿は『コラ・ブルニヨン』ではっきりと見ることができます。混住が進んだとは言っても、やはり旧クラムシー（城郭内）に定住するようになるのがごく少ないのは、職能上やむを得ないことかと思えます。筏師家族の居住地を調べたら、1820年が17カ所、1871年が32カ所でした。もともとのベトレーム界隈で比較してみると、1820年が126家族であるのに比し、1871年はわずか13家族



に減少しています。これを見ても混住が進んでいることが分かりますね。写真左は旧クラムシー域内の筏師居住跡（赤屋根の家屋）。

このおよそ50年の間に、筏師からクラムシー・コミュニケーション議会議員を誕生させてもいます。1848年の国民議会議員候補者デュパンさんも筏師票をあてにせざるを得ないほどであったことは、前にお話ししました。

その職能が誕生し数百年かけて、クラムシーの経済ならびに政治—それは同時にパリを中心にして動いていたフランスの産業—を支える大きな力を有する職能集団として、筏師はその存在が認知されるまでに成熟していったわけです。

しかしながら、陸運を牛馬力で移送する手段よりも遙かに優れた移送手段であった川の流れを利用した一度に大量の筏流し手段も、蒸気機関などによる産業近代化には抗すべき合理的な方法を持ち得ない状況に追い込まれていくのです。それは徐々に、ある時には急激に。

19世紀前後から、この産業構造の変化を敏感に感じ取り、一大レジスタンスを起こし、多量の血を流し、ついには歴史の舞台から消え去らざるを得ない運命に巻き込まれてしまう冷徹な時代を迎えるようになります。

とくに1848年革命による共和制への多大な期待があったのに対して、1851年12月2日のルイ・ナポレオン（ナポレオンIII世）によるクーデターに対しては強い危機感を覚え、レジスタンス運動を起こします。「馬上のサン＝シモン」ナポレオンは、パリを不潔で暴力・腐敗の支配から清潔で安全な近代都市へと大改造をしたことやフランス全土への鉄道網の敷設などに見られるように、社会・産業の近代化—重工業化—を急速に進めるに功あった人ですが、その一方では「職人社会フランス」「農村社会フランス」を破壊する強烈な文明観転換を図ったわけであり、筏師のような典型的な前近代的労働システム・方法を維持してこそ成り立っていた階級は、死滅の危機を強く予感したのです。レジスタンス運動がとりわけフランス中央部で熾烈であったのも、故なきことではありますまい。これに対してナポレオンはレジスタンス運動の殲滅をはかりフランス社会の近代化への筋道をつけるべく軍隊を総動員します。

1851年12月6日、クラムシーの至る所でバリケードが築かれ、オテル・ド・ヴィルが筏師たちを中心とした河川労働

者、各職種の職人たちによって占拠されます。しかしそれも2日間で、軍隊によって鎮圧されてしまいます。クラムシーでレジスタンスに参加し、有罪刑となった人は179人、うち27人が筏師です。死刑、植民地への流刑、国内（ニエヴル県外）への流刑（追放刑）、禁固刑が執行されています。

旧クラムシー郊外にクロ＝パンソンという丘陵があります。1850年頃はうっそうと茂る森林地帯でしたが、ここでレジスタンス側と軍隊とが激しくぶつかり合います。その地に



写真のようなピラミッドが建てられたのが1884年9月21日のこと。1852年7月30日に、ピエール・キジニエさん（49歳、筏師）とジェルマン・シラス

さん（40歳、プッソーの人、筏流し従事者）という2人の男が絞首刑に処せられています。ピラミッドはそのモニュメントであるわけです。二人だけでなく、筏師が極刑に処せられたことは事実で、ぼくの調べた範囲でも、1855年8月15日にゴヤール・ウドメ（1821年生）さんが、同年8月20日にロックス・ウドメ（1827年生）が、それぞれイル・ローヤルで処刑された記録が残っています。クラムシーの筏師が10人は死刑に処せられたともいわれていますから、ルイ・ナポレオンの「前近代的なもの」を殲滅させようという執念のようなものを感じることができるではありませんか。

ルイ・ナポレオンが「馬上のサン＝シモン」と称され、また、レジスタンスのリーダーたる筏師の中にはサン＝シモン主義など社会主義の萌芽思想を身につけているのが少なかつたということをあわせ考えると、歴史の皮肉さを感じざるを得ません。さらに、我がセガンも、そのパリ時代すなわち1830年代に見る姿はサン＝シモン主義者でした。

前近代から近代への過渡期の混迷を本格的に迎えます。